事例2

広島県・私立広島女学院中学高校

人間形成重視の指導を保護者とも共有し、生き方や社会との関係を深く考えさせる

広島県・私立広島女学院中学高校は、進路指導の土台として、生徒の人間的な成長を支えることを重視する。キリスト教主義教育や探究学習など、教育活動全体で人間形成を促すほか、教育環境の変化や育成を目指す資質・能力を保護者と共有するための講演会を実施し、教師と保護者がともに生徒の進路実現をサポートする関係をつくり上げている。

進路指導の土台として生徒の人間的な成長を支える

広島県・私立広島女学院中学高校は、132年の歴史を持つキリスト教主義の中高一貫校だ。例年、多くの生徒が難関大学に合格し、約3分の1が国公立大学に進学する。

同校が進路指導の土台として重視しているのは、生徒の人間形成だ。広報部部長の畑野喜信先生は次のように語る。

「中高6年間を通して、生徒が自分と向き合い、『これからどう生きるのか』『どのように社会とかかわっていくのか』を、じっくり考える機会を多く設けています。生徒には、『人間的に成長する努力を重ねた上で、学力を身につけることが大事』とよく話します」

生徒の人間形成は、進路指導に加え、毎朝の礼拝を始めとしたキリスト教主義教育、"Peace Studies（平和教育・多文化共生・人権教育）"、文部科学省のSGH（＊1）指定校としての探究学習など、教育活動全般で行っている。まず、中学校3年間は、人格の土台を築く時期と捉えている。例えば、毎朝の礼拝では、教師や生徒が生き方や信仰、学びなど、様々なテーマで話をしている。進路指導部長の久保光章先生は次のように説明する。

「礼拝を重ねる中で、生徒はかけがえのない自分の存在や他者とともに生きることの意味など、多くの大切な気づきを得ていきます。『こう考えなさい』と言うのではなく、生徒が自由に考え、豊かな人間性を育めるように意識しています」

そうした指導で人間的な成長を支え、高校では自分の将来へのイメージを膨らませる指導に移行する。

「自分史」で生き方を見つめ、これからの自分を思い描く

多くの生徒が変容する機会となるのが、高校1年次の4月に、自分を見つめ、将来を考えることを目的に行われる1泊2日の「進路合宿」だ。

進路合宿では、クラスの親睦を深めるレクリエーションや、高校生活への心構えについての講話などを行った後、「自分史」を基に、「これからの自分」について書き、発表する（**図1**）。その際、高校生活をどのように過ごし、人生をどう歩んでほしいのかといった思いがしたためられている保護者からの手紙が渡される。そのようにして、人生を振り返り、自分の将来や社会とのかかわりなどについて十分に考えた上で、クラスメートの前で一人ひとりが「これからの自分」を語る。

また、クラスメート全員分のよいところを書き、伝え合う。生徒は他者からの感想などを通して自分を客

＊1 文部科学省のスーパーグローバルハイスクール。

広島県・私立広島女学院中学高校
畑野喜信 はたの・よしのぶ
教職歴42年。同校に赴任して43年目。広報部部長。英語科。

広島県・私立広島女学院中学高校
久保光章 くぼ・みつあき
教職歴18年。同校に赴任して4年目。進路指導部長。数学科。

広島県・私立広島女学院中学高校
濵岡由希子 はまおか・ゆきこ
教職歴16年。同校に赴任して13年目。広報部。教育構想検討委員会。地理歴史・公民科。

広島県・私立広島女学院中学高校
田中佑真 たなか・ゆうま
教職歴11年。同校に赴任して10年目。広報部。教育構想検討委員会。生徒支援部。数学科。

広島県・私立広島女学院中学高校
和田知亜紀 わだ・ちあき
教職歴3年。同校に赴任して4年目。広報部。理科。

広島県・私立広島女学院中学高校

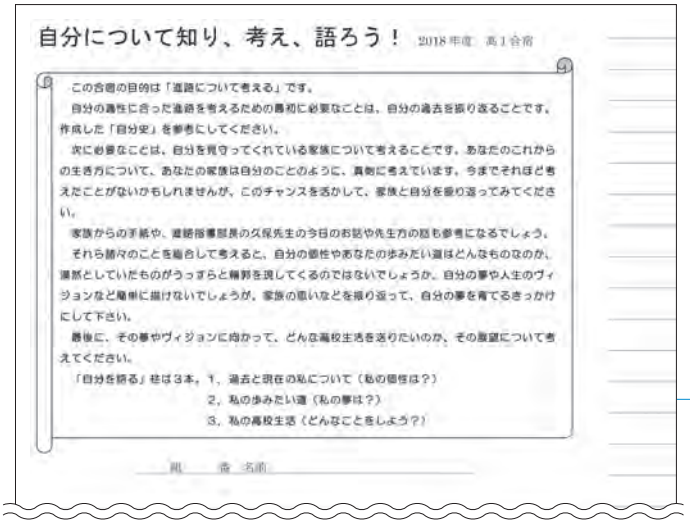
◎学院聖句に「我らは神と共に働く者なり」を掲げ、キリスト教に基づく女子教育を展開。平和や共生について学ぶ“Peace Studies”が伝統の教育の1つ。2014年から、文部科学省「スーパーグローバルハイスクール」指定校。
◎**設立** 1886（明治19）年
◎**形態** 全日制／普通科／女子校
◎**生徒数** 1学年約200人
◎**2018年度入試合格実績（現浪計）**
国公立大は、京都大、大阪大、広島大、九州大、県立広島大などに81人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大、立命館大、関西大、関西学院大などに延べ392人が合格。
◎**URL** http://www.hjs.ed.jp/

観視するとともに、自分のよさが認められることで、自信を持って高校生活をスタートさせる。

「これまでの経験を振り返って今後への決意を固めることが、目標に向けて歩み出すきっかけとなります。また、自分の内面を伝えて本心で語り合い、励まし合うことで、クラスの結束は一気に強くなります」（久保先生）

教師にとっては、個々の生徒の内面を深く理解し、その後の進路指導に生かせる貴重な情報になる。例えば、生徒が高校生活や進路に迷いや不安を抱えている時には、個人面談で「進路合宿ではこんな宣言をしていたよね。その考えに変化はあった？」などと声をかけることで、自分の出発点に立ち返らせて目標を確認させる指導につなげている。

図1 進路合宿「自分について知り、考え、語ろう！」



自分について知り、考え、語ろう！ 2018年度 高1合宿

この合宿の目的は「進路について考える」です。
自分の適性に合った進路を考えるための最初に必要なことは、自分の過去を振り返ることです。作成した「自分史」を参考にしてください。
次に必要なことは、自分を見守ってくれている家族について考えることです。あなたのこれからの生き方について、あなたの家族は自分のことのように、真剣に考えています。今までそれほど考えたことがないかもしれませんが、このチャンスを活かして、家族と自分を振り返ってみてください。
家族からの手紙や、進路指導部長の久保先生の今日のお話や先生方の話も参考になるでしょう。
それら諸々のことを総合して考えると、自分の個性やあなたの歩みたい道はどんなものなのか、漠然としていたものがうっすらと輪郭を現してくるのではないでしょうか。自分の夢や人生のヴィジョンなど簡単に描けないでしょうが、家族の思いなどを振り返って、自分の夢を育てるきっかけにして下さい。
最後に、その夢やヴィジョンに向かって、どんな高校生活を送りたいのか、その展望について考えてください。
「自分を語る」柱は3本。1．過去と現在の私について（私の個性は？）
2．私の歩みたい道（私の夢は？）
3．私の高校生活（どんなことをしよう？）

組　番　名前

将来の夢を語ったり、自分の弱さや悩みを打ち明けたりと、生徒の発表の内容は様々。担任も、自分のことを語る。
＊学校資料をそのまま掲載

保護者対象の講演会で、育成を目指す資質・能力を共有

進路の検討に必要な情報を提供し、意識を高めるために、外部講師を招いた講演会も積極的に行っている。その内容は、高校1年次ではこれからの社会で求められる資質・能力などを理解して、日々の学習への意欲につなげられるようなものに、2・3年次では徐々に具体的な進路を考えられるものにしている。

2017年度からは、「これからの学校教育を考えるセミナー」と題し、保護者や地域住民を対象とした講演会を、広報部の企画・運営で年5回実施している。そこでは、保護者の関心の高い大学入試改革の方向性や生徒を取り巻く環境の変化を説明したり、グローバルに活躍することの意味を伝えたりする中で、同校が目指す資質・能力の育成を、保護者と共有することをねらいとしている。授業参観日などに合わせて実施しており、会場の約300席は満席になることもある。

講演会の回数を重ねるごとに、保護者の意識が変化している。以前は、生徒が生き生きと活動して人間的に成長していても、保護者が偏差値やテストの得点といった数値を気にすることがあり、生徒が自分の思いの実現に向けて進路選択をする上で、保護者の考えが壁になることもあっ

た。しかし最近は、教育活動に積極的に協力し、学校や生徒を信頼して見守る保護者が増えてきたと、広報部の濵岡由希子（はまおかゆきこ）先生は語る。

「保護者の方は、これからの社会でどのような資質・能力が求められるかといった話を聞く機会があまりありません。講演会に高い関心を持って参加される保護者は多く、次第に本校の教育方針を理解し、子どもの考えを尊重して、本人に責任を持って考えさせる姿勢へと変わってきたと感じます」

同校を志望する小学生の保護者と情報を共有する意義も大きい。

「『入り口』である入学時から、本校の教育のねらいをしっかり保護者と共有することで、6年間、両者が協力し合って生徒の成長を支えられ、『出口』である卒業後の進路が一層充実すると考えています」（久保先生）

講演内容によっては、生徒対象、保護者・地域住民対象と、2回実施する場合もある。18年11月には、海外の大学に進学し、グローバルに活躍する卒業生の講演会を、生徒対象と保護者・地域住民対象、それぞれに行った（**下記コラム**）。広報部の田中佑真先生はこう話す。

「保護者・地域住民対象の講演会でも、その話を聞いてほしい生徒には個別に声をかけ、進路指導の一環としても活用しています」

SGHの探究学習を通して自分と社会を結びつける

SGHにおける探究学習は、同校が伝統的に力を入れてきた“Peace Studies”を組み込み、生徒の内面に大きな変化をもたらすなど、人間形成に大きな役割を果たしている。

“Peace Studies”では、「平和観」「対話力」「リーダーシップ」の育成を目指し、「平和構築」「多文化共生・人権」の2領域について、生徒の主体的・対話的な学びを主とした6年間の体系的なプログラムを組んでいる（**図2**）。その内容は、例えば平和構築領域では、中学校3年間を通して、原爆をテーマに、学びを広島・長崎から世界に広げ、平和に関する自分の考えを論文にまとめる。そして、高校1年次には、カンボジア内戦について、自分で課題を設定してリサーチし、希望者によるカンボジア研修を経て、学んだことを発表する。

講演会リポート

グローバルに活躍する卒業生が語る

アイデンティティーが未確立だからこそ、いろいろな世界を体験しよう

先輩の言葉を通して、将来への考えを深める

2018年11月、同校が育成を目指す生徒像のロールモデルの1人、卒業生の北岡美佐子さんを講師に迎え、生徒と保護者・地域住民それぞれを対象に2回の講演が行われた。北岡さんは、同校卒業後、米国・スタンフォード大学経済学部、コロンビア大学大学院教養学部を経て、米国公認会計士資格を取得し、米国企業で会計業務を担当。帰国後は、ニュージーランド大使館で日本と同国の教育外交を推進する仕事に就いている。

生徒対象の講演では、自らの高校生活を振り返るとともに、「ダイバーシティのカオス」と言える大学で英語力が追いつかずに全寮生活に苦労した経験や、大学院修了後、現在の仕事に至るまでのキャリア形成などについて語られた。そして、“What Stanford has taught me”として、5つの力（**下図**）の大切さを説明し、心の知能指数である「EQ」（＊2）を高めてほしいと語った。

後輩に語りかける北岡さん。卒業生が経験を踏まえて語る言葉には、親しみと重みが感じられ、生徒にとって将来について深く考える機会となった。

図　北岡さんの“What Stanford has taught me”

- English（英語）
- Resilience and compassion
  （困難からの回復力、他者に共感できる・思いやり）
- Intellectual vitality：curiosity and passion
  （学術的バイタリティー：好奇心、熱意）
- Intercultural translation and interpretation
  （異文化、他者への共感、文化間の翻訳）
- Physical and mental well being（身体と心の健康）

＊北岡さんの講演を基に編集部で作成

＊2　Emotional Intelligence Quotient の略。

図2 “Peace Studies”のプログラム

		平和構築領域	多文化共生・人権領域
中学校	1年次	「広島の戦争遺構」ポスター作成	よいクラスにするための行動宣言
	2年次	外国の原爆観とその変化	“SNSといじめ”を考える
	3年次	卒業論文「世界の平和構築のために」	在日外国人とともに生きるためには
高校	1年次	カンボジア内戦と開発について 自分で課題をリサーチし、プレゼン	理不尽な差別をなくしていくには
	2年次	沖縄修学旅行での コース別フィールドワーク	在日コリアンと日本社会 ～共生のために～
	3年次	核軍縮のための交渉ゲーム 卒業論文「核兵器を廃絶すべきか」	私のPeace Builder宣言

＊学校資料を基に編集部で作成

写真1 他県や外国から広島を訪れた生徒に、平和記念公園内の碑を案内する「碑めぐり案内」は、同校で1982年から行われているボランティア活動だ。2017年度は延べ265人の生徒が参加し、600人以上の生徒・学生を案内した。

そうした体験的な学びは多くの生徒にとって、「他人事」だった世界の様々な問題を「自分事」と捉える機会となり、自分の生き方や社会に貢献できることを深く考えるきっかけになると、濵岡先生は語る。

「カンボジアを訪れ、日本では考えられない貧しい環境で過ごす子どもたちと交流する中で、自分たちがいかに恵まれているかに驚き、『私ができることはないか』と自分の問題として考え始めます。それをきっかけとして、国際貢献などにかかわる進路を志望する生徒は少なくありません」

SGHの中心となる選択科目“Global Issues”（1～3年次）では、「国際紛争」「平和構築」などをテーマとしたネイティブの大学教員による授業を受けたり、「平和学」に関するウェブサイト上のディベートに参加したりしながら、生徒個々が探究学習に取り組み、グローバルリーダーに求められる資質・能力を身につけていく。

「各自が取り組みたいテーマを選び、発表に向けて、とことん探究する姿が見られます。そこから将来的なビジョンが膨らんでいく生徒が多

講演後、2時間にわたって生徒たちが講演者に直接質問

講演後は、希望者による質疑応答が約2時間にわたり行われた。北岡さんは真摯に答え、温かみのある言葉を返した。そのやりとりの一部を紹介する。

生徒 高校時代にしておくとよいと思うことは何ですか。

北岡 自分の関心とは一見無関係と思える分野に目を向けたり、活動をしたりすることです。私は海外大学の進学に向けて必要な勉強に集中していましたが、それとは直接関係のない分野の勉強をしたり、部活動をしたりしていたら、違う発見があったり、新しいスキルが身についていたりしたかもしれないと、今は思います。

生徒 「EQ」は、どうしたら伸ばせますか。

北岡 EQでは、シンパシー（同情）より、エンパシー（共感）が大切です。困っている人に、“I'm there for you.”と言うのがシンパシー、“I'm there with you.”と言うのがエンパシーです。相手のことを考え、寄り添うことで、EQは育まれると思います。

マインドフルネスも、EQを伸ばすのに有効です。それは、メタ認知能力、つまり、もう1人の自分が自分のことを見て、どのような人間かを捉えることです。スタンフォード大学の出願時の提出書類に、「将来のルームメートに一言」をテーマにしたエッセーがありました。共同生活を送る上で相手のために何ができるのかをアピールするわけですが、それを書くためには自分がどのような経験を重ね、どういった人間であるか、自分を客観的に捉える必要があります。そこでもEQが求められていたのだと思います。

生徒 社会で求められる人とは、どのような人だと思いますか。

北岡 単に知識が豊富なだけではなく、その知識を使って何ができるかを考えられる人、そしてEQの高い人だと思います。

生徒 将来の目標が特にないのですが、「外の世界を知りたい」だけで、留学してもよいでしょうか。

北岡 「外の世界を知りたい」という気持ちがあるのなら、ぜひ留学してください。多感な思春期は、様々な知識・経験を柔軟に吸収できます。語学ならいつでも身につけられますが、他文化を身につけたバイカルチュラルになれるのは、若い時期だけだと思います。アイデンティティーを形成している途中の皆さんだからこそ、いろいろな世界を体験してみてください。

く見られます」（久保先生）

SGHの学びでは、生徒に自分の考えを書かせることを大切にしている。講演や研修に参加した後など、多くの場面で思いや考えを書き、それに教師が目を通した結果、ほかの生徒にも共有させたいと教師が思ったものは、学級内や礼拝時に発表し、共有する時間を持つ。

「以前から生徒に考えを書かせて、全員で共有する指導をしてきましたが、SGHに指定されてから徹底して行うようになったことを機に、学校の文化として定着しました。まず自分で考え、言葉にして、皆で共有するというプロセスを通し、自分の考えを振り返って深めていく姿が見られます」（畑野先生）

礼拝やオープンスクールなどの運営を生徒に任せる

授業以外の様々な活動にも、進路を意識して資質・能力を伸ばす指導を取り入れている。例えば、毎朝の礼拝は生徒が運営を補助し、感話も生徒が行う。広報部の和田知亜紀先生は次のように話す。

「自分に自信が持てるようになると、自分の考えに信念を持って相手にしっかり伝えられるようになります。それは進路を選択する上でも、社会に出てからも必要な力です。そこで、成功体験を積ませて、人から認められる経験を多くさせたいと考えています。例えば、礼拝ではオルガンの演奏で輝く生徒がいますし、ほかにも、校内の様々な活動で個性が発揮できる機会を設けています」

オープンスクールでは、中・高の生徒会を中心に生徒が運営に参加し、学校案内や体験授業などを行っている（**写真2**）。

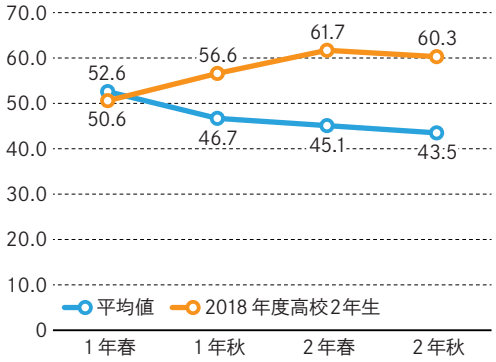
「大学入試改革も意識し、自分の言葉で説明させるようにしています。考えを整理して分かりやすく伝える力につながればと考えています」（田中先生）

写真2　オープンスクールでは、高校の生徒会が、校内ツアーを企画・運営。中学校の生徒会は、質問コーナーで学校生活や勉強の方法について、小学生らの質問に答えた。

社会とのかかわりから夢を見いだす生徒たち

それら一連の指導によって様々な資質・能力を伸ばし、高校2年次以降は面談や生徒集会などを通して具体的な進路を考えさせていく。近年は、SGHなどの成果として、生徒の進路意識に変化が見られるという。

図3　学習状況リサーチ「課題克服」の推移



「学習行動」の「課題克服」について、平均値は1年生春から下降傾向にあるが、同校の2018年度高校2年生の数値は上昇している。ほかの学習行動にも同様の傾向が見られた。

※ここでいう平均値は各回における母集団をすべて含む。

＊学校資料を基に編集部で作成

「以前は、『○○になりたいから△△学部に行きたい』と、職業ありきで進路を考える生徒が多く見られました。それがSGHに取り組んでから、『社会にこうかかわっていきたい』『こんな貢献をして生きていきたい』など、まず自分と社会のつながりから夢を語り、それを実現するために職業を考える生徒が増えてきました」（畑野先生）

生徒の変化の傍証と捉えているのが、ベネッセの「スタディーサポート」において、高校2年生の「課題克服」（＊3）の平均値の伸び率が、全国の中でもトップレベルだったことだ（**図3**）。

「探究学習などを通じて、自分が本当にやりたいことを見いだし、問題解決に取り組むプロセスに喜びを感じる生徒が増えたからだと捉えています。そうした学習から発した興味・関心が進路選択にもつながっていると思います」（久保先生）

SGHの指定期間終了後も、一連の指導や探究学習の取り組みは継続する予定だ。今後も教育活動全体で資質・能力を育みながら将来へのビジョンを膨らませ、希望進路の実現を目指す指導を追究していく。

＊3「課題克服」は、3つある「学習行動」の1つで、「自ら課題を克服する学び方（自分の苦手を把握するような学習）」であり、「疑問点は先生や友人に質問をして解決する」「何が分かっていないかを確かめながら学習する」を指す。「学習行動」のほかの2つは、「習得（基本的な学び方）」と「仮説検証（答えではなく、考え方があっているかを重視する学び方）」。